

## 秋月郷土館「黒田文庫」報告

今井, 源衛  
九州大学教授

棚町, 知弥  
山口大学教授

中野, 三敏  
九州大学助教授

南里, みち子  
福岡女子短期大学講師

<https://doi.org/10.15017/12113>

---

出版情報：語文研究. 42, pp.21-44, 1976-12-01. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 秋月郷土館「黒田文庫」報告

今井源衛  
棚町知弥  
中野三敏

## はしがき

甘木市秋月町所在の秋月郷土館に、旧黒田支藩である秋月藩、及びその当主たる黒田家の蔵書が大量に蔵されていることは、かなり早くから知られていた。九大国語国文学研究室あるいはその関係者も、昭和三十七年三月に、初めて当時の第二講座主任の中村幸彦教授以下数名が調査に赴いたのを皮切りに、しばしば現地を訪れた。その間、昭和三十七年、先代の黒田長敬氏が死去された後、蔵書の約半分、国書漢籍約千部が同家の依頼によって、昭和三十八年九大文学部に寄託され、研究室員や当時の学生の手によって、その仮目録も作成されていた。この寄託書は、やがて秋月郷土館が財団法人として新しく発足後、昭和四十八年に文学部から同館に返還された。しかし、郷土館には、これら九大寄託分以外にも、なお約千余部の図書が保存されていたので、これらを合せて計二一〇〇部に達し、ここに、さらに書庫を整備収納したのであった。

九大研究室員は、その間、郷土館の依頼に応じて、文学部中

国文学科岡村繁教授以下の御協力を得、現地にしばしば出張、図書整理と収納、さらに図書目録作成に努力した。その結果、今昭和五十一年四月に至って、ようやくほぼその目的を達する事が出来たのである。現在図書はすべて函架番号を附されて、整然と書架に収まり、綜合目録も、同文庫・九大研究室の双方に保管されている。又、その中の漢籍約四二〇部、三二〇〇冊の性格については、岡村教授の御報告「筑前秋月藩の漢学と教学」九州文化史研究所紀要第二十一号がすでに発表されている。万般はば一段落を見た今、この文庫について知り得たことの概略について報告の義務を感ずるのである。

ところで今回の報告は、国書約一七〇〇部の中の国文学関係書に限り、我々三名の専攻分野に依じて、書目を分担し、特に棚町氏は、如水をはじめ黒田歴代の文事について関心が深いので、この面は氏に一任した。また紙数の制約もあり、比較的紹介の価値ありとおぼしいものに限り、蔵書の大半を占める江戸板本の類については、特別の物以外はすべて省略に従った。

(今井)

筑前秋月五万石の初代藩主黒田長興（幼名大万。勤解由↓吉政↓）は、鷗外の「栗山大膳」に描かれる忠之の弟として少年の日を送った。父長政が勤解由（当時十四才）に秋月、弟万吉（後高政↓市正）に東蓮寺四万石の分地を遺命したのは、元和九年八月、彼が帰国の途次京都に病没する前月のことであつた。本藩福岡の正史には勿論記されていないが、忠之はその実行を洩つたらしい。秋月家臣の家書類には、長興が將軍目見に出府を断念すれば（所謂内分地か）、十万石を与えてよいと説得につとめたこと、豊前の細川越中守が長興へ船提供を申入れたこと、それも辞退して家臣団が長興を擁して出府し、寛永三年正月の將軍目見を成就する苦心などが語り伝えられている。

没後の紛糾を洞察してか、長政が五千石の傳役として長興に附した堀平右衛門——彼の猪突型忠勤なしには秋月藩は実現しなかつたかも知れぬ——を、寛永五年（十九才）には追放を余儀なくされるなど、長興の青年時代は苦難の途であつた。

寛永十年、佐竹義高息女との結婚も、忠之との不仲を案じる長興の同情者、有馬玄蕃頭や寺沢志摩守の尽力によると伝えられている。

文庫にいま「草根集寄合書」と題する一冊がある。草根集事書部の写しであるが、一及至数丁宛約二十名の筆写による。

「右者若男八人老男拾老人書之／＼時寛永拾四天九月日於武州江戸芝口認之」などの識語があるが、何故か原奥書と思われる部分は塗り消され、後年（元文年間）この本が戻ったときの識

語が書き加えられている。それによれば、島原の乱が起り、現地に急派される秋月家臣たちが、遺書にかえて分担筆写したものとされている。首丁の筆者村上源右衛門は小姓組・御伽衆百五十石。寡聞にして斯様な故例あるやを知らないが、後世の作為をも含めて小説的興味をそそられ、長興紹介の筆が神史めいたことをお断りする。

筆者はかつて如水の連歌生活を通観し、処世のための動機が大きいかといえ、その執心のかかりに深いことを証した。ついで長政については武一辺なるをたしかめ、また忠之の連歌をも調べた。そして黒田本藩文庫の実態をうかがう機を得ないまま、漠然と長興に忠之以上の、如水文事辭の継承を予期していた。この期待は裏切られなかったが、率直に言えば、思ったよりは小さかつた。

むしろ、文事をたしなむ近世初期地方大名の、特別ではない好典型と言つてよいかと思う。それはやや詳しく後に記す三つの特色を持つ。まず、かなり多い自筆本にも証される歌学への努力。二に、能への執心。三に、立圃との資料に残された、俳諧連歌好き、の実態である。

当文庫の雑記録中に「長興公御代始寛」という写本一冊があり、長興一代の諸記録——ただし、寛永十五年・島原陣まで——が集成されている。書写年代はそう古くないが、末尾に「政敏写之」また「田代氏」とあり、分封当初の一番家老田代半七の家系に伝わつたと推される。その一部に「長興公御代御稽古被成候次第」という約四丁の記事がある。すなわち、軍

法・馬・兵法・鉄炮・長刀・鑓・弓につづいて

一和は茂木専斎法師より御伝授

一歌学は烏丸光広卿より御伝授

一俳諧ハ難屋立圃流御用被成ル

一御茶湯は古田織部流を江月和尚ヨリ御伝被成 其已後小堀

遠州 金森宗和ヨリ御伝御用被成ル

一鞠は飛鳥井大納言殿より御免印可御取被成候

一能ハ今春太夫弟子喜多組七太夫より御伝被成ル

このあと、装束・立花と列挙してから、光広師事のことだけが特に別項を設けて

一御上落之年ヨリ烏丸光広卿エ御たより被成 歌学御伝之由

然ル所ニ戊年 光広卿より御歌之題五ツ参候内

草による恋

我恋はしのふの草におく露の

みたれてすへはきへやはつへき

鳥による恋

暁の八声の鳥もうらみなや

ひとこへたにもきかぬ別れに

右之二首長点にて 集にも御入可被成と思召候由 光広卿

御褒美にて 御喜悅被成候

と記されている。上落の年とは寛永三年（十七才）八月、家光の上落に扈從し、従五位下諸太夫・甲斐守に叙任せられたときであろう。また、戊の年は寛永十一年（二十五才）をさすと思う。翌十一年一月に没した長興母（長政夫人 大涼院）を悼む光広の歌が、軸に仕立てて伝えられている。

くろ田甲州上落ノのみきり老母みまかり／給へるよし  
きゝ及て／孝子の心のうちさこそ／とおもひやられけ  
れは

その草やありときかせん／道もかな  
さらぬわかれにきえし／はゝ木々

春也

右に引用した覚書の文章が、実は長興自身の姿勢をそのまま物語っているのではないかとの印象を、三部抄・百人一首などの自筆を含む長興資料、その伝わり方から受けたことを、蛇足ながらつけ加えたい。

つぎは能楽関係の記事となる。脇師成立のころの大名能楽資料として、かつは後出「花伝書」奥書の説明ともなるので、演目の煩も省略せずに全文を紹介する。

一大猷院様御代 公方ヲ始諸御大名方為御慰ト乱舞被遊候

其刻 祖父喜多七太夫工能御稽古被成 左ニ記候御飄折々

御能被遊候 七太夫儀大坂一乱之節城ニ籠 落人ニ罷成

十方無之時分 長政公御引取被成 命ヲ継申故 已後迄も

御内同前ニ御出入仕候 春藤六右衛門儀 芝御屋敷御移徙

之節より御出入仕候 律儀成者ニ御座候とて「七太夫同事

ニ御覆間迄も被召寄 被懸御目 其已後不相替御出入仕

御懇ニ被仰付 悴彦二郎十七才之時 初而張良之脇仕候節

御指図ニて 七太夫ニ大夫被仰付 小笛庄兵衛 幸五郎次

郎 葛野庄九郎ニ役被仰付候 何茂脇師張良之脇仕候ニ

ケ様名人共ヲ揃 脇仕候儀 親六右衛門先祖より以来無御

座候御願故、ケ様之様子已後迄脇之威光ニ罷成申候由ニテ厚ク御礼申上候。彦二郎事脇首尾好仕廻申ニ付、其節藤島老尺八寸之、御脇指被遣候。葛野九郎兵衛、小笛庄兵衛与右衛門、大倉弥右衛門、其御ヨリ御出入仕候。御懇被仰付候。

一、大猷院様御代ニ節々御寄合被成、御能御興行之御連衆、松平新太郎殿、有馬中務殿、京極丹波守殿、金森長門守殿、内藤左京殿、後ニ菅市左衛門殿、石尾七兵衛殿、松平右京様、右之御衆御出入被成、御心安御慰被遊候也。

高砂 加茂 難波 国栖 黄帝 頼政 忠度  
 箆 清経 八島 友長 巴 兼平 真盛  
 敦盛 東北 芭蕉 湯谷 松風 定家 野々宮  
 江口 楊貴妃 桧垣 井筒 采女 道成寺  
 是界 黒塚 葵上 紅葉狩 羅生門 土蜘蛛  
 野分 木賊 三井寺 藤渡 百万 班女 柏崎  
 浮船 歌占 善知鳥 夜鳥 土車 藍染川  
 角田川 鳥追 放下僧 七騎落 卒都波小町  
 通小町 高野物狂 鶺鴒 檀風 船弁慶 橋弁慶  
 小袖曾我 竹ノ雪 邯鄲 蟬丸 正儀世守 三輪  
 源氏供養 天神 遊行柳 鞍馬天狗 蟻通 融  
 天鼓 熊坂 自然居士 梅枝 張良 唐船  
 箆大鼓 藤大鼓 小督 桜川 松山鏡 山姥  
 獅子 葛城 小鍛冶 杜若 花月 猩々 景清

このあと、同覚書は島原陣の記を載せて終るが、その最終項

寛永十五年三月秋月に掃城した長興が、福岡に忠之を訪ね、祝儀の振舞に与る記事の中に「其節、大倉主馬、藤木五十助ト申太夫を上方より御下被為成、三日御能被仰付候」と見える。

最後に、長興の俳諧好きを物語る資料として、郷土館陳列品中立圃に関する左記五点を紹介する。ことに二、三、四、五の四点は稽古(草稿)であるだけにおもしろい。本誌に一のうちの未発表部分とともに翻刻する。

- 一、立圃・長興両吟奉納俳諧千句 全十卷  
 西日本国語国文学会翻刻双書(第二期ノ三)『連歌俳諧集』  
 に島津忠夫氏により紹介された太宰府天満宮蔵本の別本。  
 第一・三・五・七・九の巻々が長興自筆。  
 太宰府本は初巻と、第九の首部(表八句・裏七句)を欠く  
 が、首部を欠く第九が初巻であることが、当別本により判  
 明した。
- A、 第一 賦鍾何俳諧連歌  
 咲そむる梅こそ花の天下一 長興
- B、 第九 賦餅何俳諧連歌  
 初雪やさなから庭の銀砂子 長興
- 二、立圃・長興・元清等『賦餅何俳諧連歌』百韻 一卷  
 たちまちにも守の日待哉 立圃
- 立圃 十九 長興 十五 元清 十九  
 重都 十五 興時 十五 興章 十一 興里 六
- 三、長興・立圃・興章等 俳諧連歌百韻 一卷  
 なき跡の秋かそふれば菩薩かな 長興

長興 十八 立圃 二十 興章 十四

元清 十四 興時 十二 重都 十三 巡也 九

四、立圃・歩月・政家等誹諧連歌(四十一句) 一卷

口きりの茶の湯をしるやつほの内

立圃 九 歩月 六 政家 七 興時 七

又可 八 興章 三

五、長興・元清両吟誹諧連歌百韻 一卷

へ春立と世に鶯や触使 長興

合点と添削、評語若干の書入れがあるが、評語はごくわず

かで、署名もないので、立圃評とは決定し得ない。

なお、連歌関係は、重松裕巳氏が「連歌俳諧研究」第四十八号に「秋月郷土館の連歌書」として報告されているので参照されたい。(棚町記)

## 二

八代集、樹一四冊、函入。綴帖。糸が切れて乱丁多し。函架番号一〇・二・二。近世初期写。古今集のみについて記せば貞応本系統。定家の奥書につづいて、

證本之旨趣奥書既明白、尤足採用、仍不顧狼藉、聊染菟毫也、偏是応教命、忘後嘲而已／儀同三司善成

さらに、これに次いで、

右集者自將軍家御賜之御本定家卿自筆於一條高倉御陣中書之、防州岩国住源弘節類懇望之間、雖有老眼之憚、為末代之證本、不違仮名遣等、令書写、数ヶ度校合畢、尤可秘之者也

とある。 文明六年甲午八月廿日 持教判

古今和歌集 大(二七・〇×一九・五センチメートル)、二〇巻一帖。長享二(三年写、綴帖。表紙鳥の子、墨流文様。鳥ノ子料紙、墨付一七二丁。嘉禄本系統。長享三年堯恵写。別置本。罰界あり、頭注欄を設けて詳密の頭注を付す。巻末に墨減歌十一首。嘉禄二年定家の奥書のつぎに、

此一帖以家本令書写校合訖、尤可為證本矣／左近中将為邦卷末に、

此本ハ下愚幼学ノ最初ヲロカナル聞ニマカセテ先一往スコシキノ義ハカリヲ他本ノ面ニ注シ付侍リ、以此義ヲ、当流ノ小滴ヲハカルニ非ス、雖然白地混乱ノ旨ヲハ大概シルシ分侍リ、誤テ暗窓ヲ出サハ此道ノ嘲ノカレカタキニヨリテ可投火中侍ルヲ、西塔北澗掟連懇切アルニ依テ、心ヲ翻シ今付与畢 照覽ノ後速ニ愚カ本意ヲ逐ラルヘキ者也

堯恵(花押)

長享三年二月五日

この本については、既に工藤重矩氏が研究を進め、西日本国語国文学会大会(昭和五十年九月二十一日)において口頭発表された。氏によれば、注は毘沙門堂古今集注や三流抄に関係が深いとのこと、近日その論文も発表される予定である。

辭案抄 大一冊、室町末写。布表紙、函入、別置、奥書に、「此抄以定家卿自筆本令書為訖、尤可謂證本／延徳二年二月日 宋世判／取授申安富右兵衛尉元家也」とある。宋世は飛鳥井雅康(文明十三年歿)。

新撰髓腦 樹一冊、近世初期写、丹表紙。歌学大系本と同系本。誤脱が多い。函架番号一〇・一・一

六百番歌合。大(二六・七×二一・〇センチメートル)四冊  
文明二〜三年写。別置。享徳二年親長の識語を持つ系統の本  
で、各巻に奥書と印記あり。第一冊は「文明二年林鐘中辨以仙  
洞御本書了/校合畢(墨印)」とあり、第四冊は「文明第三孟  
夏中旬馳筆畢(墨印)」とある。印記(墨)は「興」と読まれ  
る。保存も良好で、善本の一として注目し備いする。

時代不同歌合、樹一冊、函入、近世初期写。料紙鳥の子。函  
書に「真流院様御筆」とあり、真流院は、黒田長興の三女、小  
笠原老岐守長祐室、貞享元年歿。内容は百五十番、三百首。人  
麿の「瀧田河」から宮内卿の「から錦」まで。

なお、藩祖長興の写した三部抄・百人一首があるが、それら  
は棚町氏が触れられている。

歌書秘々。大一冊、近世初期写、別置。八幡宮文庫旧蔵。内  
容は竹苑抄。歌学大系本とは相違あり。奥書は、

歌をほしといへとも此十にすくへからす 此外善悪の跡あ  
りならふへし 是は家の秘事初心のためなり 夢々他見有  
へからす 為頭入道殿小童の時竹苑にてをしへたまへる民  
部卿入道殿為家卿の言葉為頭のかきあつめたまへるなり 是  
は世間にひろまらざる書也 よくく可秘々々也/本云為  
家・為頭・能基三代也云々/天文六年二月十日 書之也。

此一巻有人所持せられるをみるに いとこころにあひ  
て面白思侍しかは 其人につきてなんうつしえて 此道の  
便とも成なんやと つれつれの折から寝屋のまにひらき

なかき案と是をなし侍ける。

三好殿恒房歌 一巻。慶長ごろ写。書名は、函書にこうある  
だけで、本文には見えない。三好恒房なる人物についても不  
明。巻頭は、「たちかへてけふは一重の袖かきにさく卯の花の  
雪そすゝしき」以下十六首。

伊勢物語 大一冊、近世初期写、綴帖装。函架番号八・一・  
三。天福本の奥書のとに、長興の筆で根源本と武田本の奥  
書とを合せて追加している。

伊勢物語聞書 横一冊。近世中期写。朽葉色金縷綴子表紙。  
巻頭に、

伊勢物語聞書、凡諸説には先題号の心をのふる事さたまれ  
る儀也。逍遙院西殿也に天福年中に定家筆をそめらるる本  
久しく御所持也。後若州武田殿へ参たる也。又一本は合多  
本所用捨也。可備證本とある本有之、自筆、三好長慶朝臣  
若州より参たる也。永禄年中に河州飯盛の城に飯盛三好有し  
となり 此時紹巴所に四五日あつかられしと物語也。又近  
代は抑々伊勢物語の根源と有本世に失たり。定家卿自筆昔  
は有へし、此奥書の本にて聴雪逍遙院也あそはされしとて  
称名院殿聴雪の御子いつも此本にてあそはされしと也。紹  
巴にも右之本にて被遊しと也。書写有て被下事は天福の奥  
書の御本也、されと彼奥書をはあそはしくはへられしと也、  
是を以て題号の心あきらか也。

とある。

源氏物語 大五四冊、近世初期写。函架番号八・一・一〇。  
袋綴。空蟬・花宴・花散里・関屋・蓬生・朝顔・かがり火・藤

袴・横笛・鈴虫・御法・匂宮の十二帖は長興の筆である。昭和  
三八年三月調査の際、箱の蓋に「宗印様（長興）御筆有之」と  
あったが、現在箱は廃棄されて、ない。夢浮橋の奥書に、

此源氏物語は是齋兼如とて兼載のゆかり同長珊三条西殿遺  
選院殿に聴聞の行末をしたひ、奥州にて聞たるに、猶あき

たらすして、五とせはかり草庵のかたはらにかりねして、  
夢のうき橋二たひよみわたしけるに、所々説あるとて、相  
伝の本にて他筆をかり一部うつして校合の次しるすものな  
り時に天つ正しき空七かへりのほとけに水そそきたてまつ  
る又の日 紹巴判

とあり、天正七年四月九日紹巴奥書本の転写本である。本文は  
肖柏本系統らしい。ミセケチ、朱点がある。

源氏物語歌。樹一冊、近世初期写、函入。奥書ナシ。巻頭を  
欠き、須磨の「わかれても影だにとまる」から夢浮橋巻末まで。

岷江入楚、大五四冊。近世中期写。

古事談 大三卷一冊。近世初期写。黒表紙・袋綴・別置。八  
幡宮文庫旧蔵本。巻末に本文とは別筆で、旧蔵者藤原保親が嘉  
永六年上京して購入し、誤脱を補ったあと、八幡宮に奉納した  
旨記している。

花伝書。大(三三三・〇×二二三・〇センチメートル)八卷一冊、  
寛永二十一年写。綴帖。白描絵入り。蔵書印ナシ。いわゆる八  
帖本系統。絵はかなり修正の跡あり。奥書は

(本文と別筆) 右一冊者観世阿弥より曾祖父四郎次郎へ致  
相伝砌、祖父五郎次郎に渡し、五郎次郎より親にて候小左  
衛門に相渡し、小左衛門方より私に相渡し申候 内々御目

被下其上殊別而御執心ニ御座候間書写進上仕候 不及申上  
候へとも他言他見被為成間敷候 以上

寛永二十一年五月吉日 幸五郎次郎氏能(花押・印)

黒田甲斐守様

次の丁の裏面に、本文と同筆で、

右一卷観世阿弥老此一代他家無類候 一心極教悟花情已含  
風情口伝之集一大事ヲ観世大夫殿我等観忠能ト申候ニ別而  
被懸御目候故に御判被成被下候処に不慮火事ニ失申候 下  
書御座候間我等判仕候 幸之家之宝ニ候 不斷此習ヲ工夫  
肝要也ノ日五郎次郎ノ元和五年己未九月十九日己亥日  
山城宇治三座之衆幸大夫清五郎殿まゐる

とある。本文筆蹟は五郎次郎のそれと異なるが、彼が幸家に伝っ  
た家伝書を何人かに書写させて、庇護者の一人であった長興に  
献上したものであろう。古活字本(日本思想大系本)に比し小  
異文がある。

なお他に、特別陳列館の常時展示品の中に、左記がある。

和漢朗詠集 卷子二卷。伝尊朝法親王(慶長二年歿)筆。奥  
書はない。

後撰和歌集 大二〇卷二冊。近世中期写。奥書なし。

十鉢和歌 一卷 鷹司兼熙(享保一〇年歿)写。

続世継 大一〇冊。今鏡である。近世中期写。奥書なし。

詠二十首和歌 一卷 伝姉小路基綱(永正五年歿)自筆。

また、昭和三十七年第一回目の調査の際に触目メモしたもので、  
現在文庫に見当たらないものが若干ある。函入りで装釘の善



美なものも多く、現在あるいは東京の黒田家本宅に保管されているかと思うが、まだ確かめてはいない。書名は、

十三代集、大二〇冊近世中期写。奥書はない。

大かゝみ 大八卷八冊。近世中期写。異文がある。

増かゝみ 大十七卷十冊。近世中期写。巻分けが流布本とかなり異っている。奥書はない。(今井記)

### 三

舞の本 横本、写本三十八卷十冊。濃紺の表紙に朱地金箔散らしの短冊簽を貼りつけた、如何にも本柄の良い幸若舞曲の正本集である。奥書の類は一切ないが、紙質、筆跡からみて元禄を下ることはあるまい。本文筆者も未詳であるが、少くとも三筆以上になるものと思われる。大頭流の系統を引く本文としては、さほど注目すべき年代のものではないが、全三十八曲の内「みやこいり」の一曲を含むことは特筆に価しよう。この曲は笹野氏の「幸若舞曲集」にも、歌謡として「都あたり」の名でその一節のみが掲載され、未だその全曲のしられざるもの一つとされているもので、ここにその全曲が明らかになる。以下に「都あたり」と同じ部分を若干引用しておく。

八てう殿九てう殿うくはんむくはんの人々までみな御ともときえけりみやこあたりのさとく／＼にふしみふかくさとやははたよともあらいたけたのさとまつに花あるふちのもりいなりいまくまの六はらやさかちやうらくしきほん中山きたしら川かものりうけうんりんししてふなをか山やれんたいのをはらしつはらくらま山きたのやひらのときはのさとさかほう

りんしうつまさとうし四つかかつらのさとこか山さきやたからら

右の短文でも、傍線部分は「都あたり」に見えぬ句文である。猶「みやこいり」全曲は本稿の末に南里みち子氏による翻印を附載する。

太平記秘伝理尽抄 大本、写本四十卷三十二冊。栗皮表紙の堂々たる体裁を持つ。序、跋、奥書き等の類一切備わらぬが、各半丁十行、漢字カナ交りの書体は明らかに近世極初期の筆勢を伝えており、内容の精査を必要とするものである事は間違いない。

にせ物語 大本、写本一冊。葉袋紙風の表紙左肩に「にせ物語全」と墨の打付書外題がある。本文は雁皮風の斐紙に各半丁十行の墨付六十四丁半。書体からみて寛文・元禄期の写と思われる。

本文は巻分けのない写本系のもので、上下二巻に分けた板本とは随所に字句の異同が目立つ。しかも写本系の内でも良本とおぼしく、例えば岩波古典大系所収本文の奥書の部分で、底本(板本)脱漏の部分を書本(内閣文庫本)で補った部分に「此事只笑而可<sub>レ</sub>飲<sub>レ</sub>」とある所、該書では「此事只笑而可<sub>レ</sub>弄<sub>レ</sub>」とあって、該書によってようやく文意明瞭となるなどが目立つ。

村上編撰雜記 大本、写本二卷二冊。外題は表記の如く表紙に打付書される。上巻末に「寛文六年丙午八月日八十六歳而

書之村上清空」、下巻末に「寛文七年丁未／林鐘日八十七歳而書之村上清空」と奥書があり、以て著者及び成立年代も明らかで、本文紙質、書体何れもこの年代を証している。但し村上清空に關しては未詳。内容は特に地域的な偏りをみせるわけでもない諸国奇談集ともいうべきもので、年代からみて貴重なもの。文章は甚だ素人臭く稚拙である所がよい。

内容は「兄弟強弓」「被惡子」「所写之兒」「平内太郎」「赤井惡右衛門」「座頭摺鉢」「木實峠」「鎌苧山姥」「兒之面」「和那宮」「千崎山姥」(以上巻上)「坂上是則」「玆阿弥」「博密山越」「足力看ル」「猿澤池兎」「長壁殿」「山中左兵衛」「宗満岳」「月有空」「深山作鬼」「綱最期」「信濃人不居屋敷」「越前ノお千世」(以上巻下)以上であり、墨付は上巻七十四丁半、下巻六十九丁半。

誹諧十三箇条大事 卷子本、写本一卷。外題は後人の書で本文とは別筆であるが、内題に表記の如く書かれ、以下「賦物の事」「面八句のしやう」「脇句」「第三」「四句目・八句目」「発句のらんとめ」「同けりとめ」「第三らんとめ、もなしとめ、にとめ」「下の句のつゝとめ」「下の句のにとめ、ととめ」「上の句のにとめ、してとめ、にてとめ」「花」「あけ句」と十三ヶ条にわたり、奥書に次の如く記す

右は幽齋尊翁より長頭丸公に伝り丸公より良徳相伝せられけり予是非となけきて伝をうけ侍る其方ふかく御所望故如斯也以上

承應二曆／己正月吉辰 清水不存判

吉田氏友次雅文

右者愚伝受之卷則御写候上者毛頭無残所者也

万治二亥／霜月如意珠日 無能子

山中氏利平雅文

延寶元癸丑小春如意珠日写之畢

浅入

貞徳から良徳へ伝わるとあれば、内容は「天水抄」系の伝書であろうが、年代からみて一卷に纏った俳諧伝書としては極初期のものに属すると思われる。良徳は慶安五年に貞徳からの伝を土佐の燕石に授け、それが明暦元年に燕石の手から出た時、現在の「天水抄」の形になった事は、小高氏の「天水抄の諸本について」に見える通りであろうが、同時に良徳はまた、その師伝をこのような型に整理して乞うものに授けていたのである。

清水不存は近時再び注目されはじめた尾張の貞門俳人清水春流。吉田友次も三河貞門の有力な一人で、無能子はその号である。良徳、春流、友次といった流れを示すだけでも、この資料は面白いといえる。山中利平は未詳。浅入はまた別人でもあろうか。伝来からいって浅入は秋月黒田家所縁の人となるわけだが不明。又、本館蔵、野坡の俳諧伝書については、白石佛三氏による紹介が「中村俊定先生古稀記念 近世文学論叢」に載る

前五色集 大本、写本五卷五冊。縹色表紙に外題は短冊簽を

左肩に貼布して「前五色集 青之巻」以下、赤・白・黄・黒の巻順を墨書する。墨附全八十八丁。各半丁十行。元禄以降の上狂歌壇によく京都派ともいふべき一派をうちたてたその総帥として、門下に九如館鈍永を擁した自然軒鈍全の狂歌集である。板本は無い。鈍全実名は寺田宮内といふ、京都甘露寺家の諸大夫というが、その伝は殆んどしられていない。まとまった集も殆んど聞かない。この書に対して、「後五色集」もあるべきか。序文を写しておく。

興歌はからのやまとの哥に長しぬるあまりのなくさみならんに、やつかれはからのやまとの哥のよみかたきにしのひす興哥にやすんし侍る。たとへは鷹にして小鳥たもえとらすてかはつつかむたくひならし。しかるに血氣さたまらざる時よりいひもてはやしぬる興歌いくらかあらんすれと、一首たに書とゞめざるは、なましひに世にもれ興哥に名の残らんを恥れはなり。此はるやんことなき方これかれにしたかひ奉り、吉田殿にまかり、梅の花さかりなれば興歌せよとあるに

いひふりし物こそ姪よ春はまたひかしの梅の香も吉田やまかく申侍れば人々興に入らせられ、此としころよみしを書集めよ、序して送らんとの御言葉もたしかたさに、四季のわかち、くさくさといわゆるの次第もなく、おもひ出るにまかせ書付侍れば、哥數五百にあまりありぬるをとちふみ五巻になし置侍る事になむ

此の書、他に類本を殆んど見かけぬが、鹿島の祐徳文庫にも一本を蔵している。

#### 自然軒鈍全

三美人 半紙本、写本三冊。共紙の表紙中央に「三美人 壹(式・三)」と墨書。内題もなく、序・跋もなし。各半丁七行、墨付全二百五十丁。

内容は柳賀とおちせ、白賀とお中、お道の二組の男女の恋愛を画いており、典型的な人情本なのであるが、扱、口絵はおろか挿絵もなく、半紙本の紙面一ぱいに大字で書き続けた所、一見すれば幕末実録物の写本といった感じである。板本の存在を知らないで、恐らくは素人の習作かと思うがそれにしてはこなれた書きぶりを示している。しかし内容のわりに余りにも無趣味な造本で、同じような例を他に見出せない。各巻末に「新堀／奥竹印」と墨書するのは、何やら船宿に備えつけた貸本といった趣きでもある。何れにしろ余り例のない珍物といえよう。

その他文庫全体の集書は近世関係の板本・写本類がその大半を占めることは言う迄もないが、その主たるものが秋月藩校稽古館の蔵書と、「内文庫」と称する秋月城内の奥向き文庫のもの故、その集書内容にも自づと限界があり、文学関係では以上の他に特に紹介すべきものは見出せない。唯一「郷土先賢遺稿」として別置された一群があり、中に原古處、同采蘋、及び原家代々の詩文遺稿類が三十部ほど纏められている事は書きそえて置くべきであろう。

また同文庫の漢籍(和刻・日本人選著を含む)に関しては、前記、岡村教授の論文を御参照願いたい。(中野 記)

終りに、前述の如く、黒田文庫の調査は長期且つ断続的なものであったから、その関係者は多数に及んでいる。学外者では、島津忠夫氏、重松裕己氏等も然りであるが、特にここにはこの数年間酷暑厳冬を厭わず調査・整理に同行し協力を惜しまれなかった歴代の研究室助手・学生諸君の熱意を忘れることはできない。ここにその方々の名を記して感謝の意を表したい。

福井迪子・板坂耀子・工藤重矩・狩野啓子・柏原卓・南里みち子・坂本真理子・中島あや子・田籠博・白石良夫・稲川順一・花田俊典・高瀬正一・福寿貴美子・後藤信子・崎村弘文・田坂憲二（敬称略）

また郷土館関係者としては、田代政門氏・伊藤三次氏・井上政喜氏・坂口光夫氏等に館長あるいは事務担当責任者として、陰に陽に多大の配慮を煩わしたことも感謝に堪えない。併せて厚く御礼を申し上げたい。

## 長興・立圃俳諧資料

棚町知弥

当翻刻のため秋月へ再調査に赴いたが、文字通りの草稿である。資料三〇五は現在格納場所が判らず、十年ほど以前の手控えによらざるを得なかったことをお断りする。

なお、資料一〇の第二・四・六・八・十各巻は立圃自筆で、大宰府天満宮蔵本と対をなすことを申し添える。

## 〈資料一A〉

第一

### 賦鐘何俳諧連歌

咲そむる梅こそ花の天下一  
 今朝はかすみも晴の茶の会  
 東風の吹かたは障子をたてさせて  
 いとゝあかりのよき家づくり  
 さし図より好みにこのむ物すきに  
 魚よ鳥よと分つ料理者  
 川上の山路の月にともをしつ  
 しつほと露にぬれもこそすれ  
 うおほしめせ紅葉よりまつ袖の色  
 すたれこしなる舞の目つかひ  
 引出る御庭の猿におちおそれ  
 参る人なき山王のまへ  
 あらさひし心のとまる志賀の浦  
 夜船の苦にしらぬ方角  
 風にまく浪はともえのことくにて

（以下「連歌俳諧集」九〇ページに）

長興 同 立圃 同 長興 同 立圃 同 長興 同 立圃 同 長興 同 立圃 同 長興 同 立圃 同 長興 同 立圃 同

〔資料 一B〕

第九

賦餅何誹諧連歌

初雪やさなから庭の銀砂子

絵の具の色もいかて寒菊

盃の台は歳暮の祝ひにて

千秋楽をうたふこの宿

有明の月見に琴や調ふらん

次第にむしの声そ遠のく

磯きはのうきもは浪にゆらめきて

あしき湊につなきをく舟

かつきする蟹のわさこそななきなれ

きぬのほうしは後家に似あはし

なきをとふ涙はさらになりやまで

精進の折に出るたうこそう

知識まで心にかけてし児若衆

送る詩歌やかた見のまもり

はるかなる田舎下りの門出にて

たしなみけらし節分のまめ

冷しき鬼もおそるゝましなひに

太刀を枕の月の下ふし

長き夜はくたひれつる辻かため

行幸はたゝ義式あるもの

御心のまゝにもならぬ花見にて

手折ともなき梅は名木

長興 立圃 同 長興 立圃 同 長興 立圃 同 長興 立圃 同 同 長興 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

二ものゝふのむかしの春をかたり出  
八しまの磯をこきまはる船  
夜もすから釣を一しほ心かけ  
狐のすくるあしをとをきく  
みとり子の枕に鎌をならへをき  
いひをしへける草の刈やう  
月の夕笛吹事を能にして  
猩々はよくまはり灯籠  
うらかれの声を不出来に作りなし  
いとゝ難波の浦はあれ候  
父母と思ひし歌も忘れ  
はろゝとたつやま鳥をとる  
うき雲の上見ぬ驚はまひさかり  
そ矢をくり矢に射るはくせもの  
ニッ 鎮西へ行ははかなき氏の人  
神のにくめるふねは悪風  
むくつけきむくりは名のみ残しをき  
えひすのてたてしれる戦ひ  
富貴する人はかせきのつよくして  
綾や錦の糸しなをわく  
すへらきの御代はめてたきしるしあれや  
驚も位を得たるかしこさ  
池水のふかみに魚のあつまりて  
月影はかりすむ古屋しき  
六条のあたりは霧の晴とをり

同 同

秋の別をおしむ御堂衆

花を待心はちともましまさて

題にそむきし春のこの葉

三 曲水のましはりはまた成かたみ

ぬき手をよきをしらぬ川たち

鶴のまねいたす鳥はいとおかし

やはたのやまの太木のかけ

暮るより数の御あかしともしつけ

ひかりうすやく廻廊の月

そろ／＼と雲吹をくる秋の風

菩薩やいますうら盆の空

たからかによみぬる経のたうとく

大蛇も角をおとすあはれさ

悪につよき心や善につよからむ

のほらてくたるふねの追風

塩時のたかはぬこそはふしきなれ

かた／＼にうつ和歌の浦浪

三 筆架にはふたつはをかぬ書院筆

いさや香炉をかけにせんの暮

夜もすから座所の伽はにき／＼し

参らせにける菓子は色／＼

殊勝さは八瀬の山家の独僧

念仏の声にそふる川浪

あれまて哀をやしる都鳥

そちも思ひのありやなしやは

興 同 園 同 興 同 園 同 興 同 園 同 興 同 園 同 興 同 園 同 興 同 園 同

うらみてはむつさと空を詠居て

花にはにくき月の夜あらし

子をつれてとまり雀のはつとたち

永き日くれにともす続まつ

おもほえず盗人なりといひふらし

何とかしたの身のをきところ

名 打われてかた許なる太刀のさや

質屋の見せにおほき色／＼

屏風には絵とりの品をつくさせて

あかまへ申す人の年の賀

けいはくをおもてにたつるうらやさん

むさとあはする夢物かたり

三郎なりし子はおふくろにほめられて

くらまの山へのほるかしこさ

谷／＼の槍を獲のとひありき

のそむもおかし水底の月

身にしめて思ふそなたのつれなさよ

秋のいつそや下されし帯

つはりする気色ををそく見給て

時ならぬものをこのみぬる人

ウ 昔こそ二月に瓜の出来つらめ

花の都とおなし奈良つけ

土色もかすまぬ風炉の手きはにて

下地に念を入しぬりもの

そこねしを作りなをせる宝蔵

同 興 同 園 同 興 同 園 同 興 同 園 同 興 同 園 同 興 同 園 同 興 同 園 同

心かけある宮もりはよき  
聖代のためしを奏し奉り  
今にたえせぬ万葉の和歌

〈資料二〉

賦餅何詐諧連歌

たちまちに月も守の日待哉  
天道にかなふ秋の詠吟  
草木には雨露のめくみの浅からて  
野中につなく牛は何疋  
車をや皆村里にをきぬらん  
唯ひまもなくよる木綿糸  
つきにける手まりの遊ひ世にはやり  
誰しもまなふ閑人の曲  
梅枝の能を此程習ひそめ  
うくひす袖の立居しほらし  
永日もあかぬ御兎に打とけて  
持ぬる経のひもはあやしき  
祈禱には物につかれやおそれけん  
身をきよめつゝはく銘の太刀  
行幸のそらさへ晴の時めきて  
今一度までみねの紅葉、  
よる鹿をあやまる笛に吹にがし  
月に水田を見まふ百姓  
堤さへ昨日の雨にくへかゝり  
なかるゝ魚をすくふおさあい

同

立 圃

立 圃

長 興

元 清

重 都

興 時

興 章

興 里

立 圃

長 興

元 清

重 都

興 時

興 章

興 里

立 圃

長 興

興 時

重 都

元 清

興 章

興 里

立 圃

花のちりをそろりゝと取集

どら打ならず春の茶の会

二 長閑にも衣紋けたかくつくろひて

門立こそはあやなけいせひ

つれふしの小歌に人のまよはされ

湊いするふねはなんさう

長崎は塩の満干もわかされや

霧にふきそふたはこの煙

さひしさは秋こそまされば部屋のうち

終に小鷹はつかふともなし

兵法は月の夜比を大事かり

こゝろしつかにすむくらま寺

炭やきは春夏秋にらくをして

むさとほきはらぬ山の松の木

祇園会の鉾は諸人のめにかゝり

とらるゝ事もしらぬきんちやく

帯ひもときてねたりし宵の間に

おさなき袖をいとふ女房

せなひとり爰へこよとて小手まねき

色に出たるこゝろ見くるし

跡先もしらて上戸は給酔て

くり事をのみいふはおかしき

みたるゝは何のせんなきわくの糸

安達原にまよふ山ふし

狐火は見えつかくれつきたまらて

長 興

立 圃

興 里

興 時

興 章

立 圃

長 興

興 章

重 都

立 圃

興 時

長 興

元 清

重 都

立 圃

元 清

興 章

興 里

興 時

元 清

立 圃

長 興

興 章

立 圃

長 興

興 章

興 里

なふらんきくは枝さかへけり  
 月に今朝作りし庭をわき清め  
 身にしめつゝもまはす人形  
 花なれば順になかむる筆もたせ  
 春の付句をこのむ俳諧  
 三天神の告はのとけき夢心  
 安楽寺へといそきたまへり  
 風あつる筑紫の舟は難義にて  
 みやす所をうばひぬる袖  
 馬鹿者は命もしらぬ恋狂ひ  
 よるゝしひ越る高へい  
 城内のはかり事こそれぬらめ  
 倭糧米のつくるかなしき  
 卒人はひとかたならぬおもひにて  
 ねらふかたきの行衛しられす  
 ねこにおちてねすみは穴へはいるらし  
 どこになりともをけ油つき  
 聖靈を送る夕の月きよみ  
 ふく秋風やさむき川はた  
 露の間もたらいの湯にしつかるへし  
 すそむさくなる馬はあやなし  
 どの道は唯乗物にのらしませ  
 杖をちからにせされとし奇  
 風あれはちともこたへぬ破家  
 焼働てみたれいるくに

元清 重都 立圃 元清 興里 元圃 興時 長興 元清 重都 興章 興時 長興 元清 重都 興章 興時 元清 重都 興章 興時

脇指の出来は殊更見事さよ  
 順のかわらけめくる賀殿  
 あひはれの中をゆるすもかぎりあれや  
 関もすつきとすへぬかよひ路  
 行先もまたなんかいの舟の上  
 渡唐をのそみくたる九州  
 月花もこゝろに持し法の僧  
 文字もうららに見ゆる掛物  
 名年号はまだ此春の絵馬にて  
 神そとおもひおかむ旅人  
 小むすめは縁を餘にむすひかね  
 見めのわるきを悔む笑止さ  
 ひいなをば下手ともしらす詠て  
 京にいなかの有といふかも  
 いささらは廿日の月を詠はや  
 今まいりする袖そ露けき  
 霧雨にぬれし及ほしのきたなさよ  
 きねか出立は礼義はかりそ  
 御田植やみな氏人わさならん  
 春日山こそしけりはひこる  
 すえにける鷹をはふつと取にがし  
 うつらゝとまもる大空  
 軍はいの星のめくりを伝受して  
 張りしかぶとの手きはこそよき  
 皿はこのうち置難くおもふらし

長興 重都 立圃 元清 興時 長興 元圃 興時 元清 重都 興章 興時 元清 重都 興章 興時 元清 重都 興章 興時



ほこりまさらぬ絵の具うつくし  
けつこうな枕屏風を立ならへ  
水もらさしとめてねにけり  
夢にさへ忘ぬ花の御すかた  
かすみもふかしえんもふかきや

興時  
興章  
元清  
長興  
同

立圃 十九  
長興 十五  
元清 十九  
重都 十五  
興時 十五  
興章 十一  
興里 六

〔資料三〕

なき跡の秋かそふれは菩薩かな  
四日の月のうちはむらさき  
短冊にかくへき歌を身にしめて  
御心もちのひろき公家衆  
狩衣のゑもんことなる袖のゆき  
能のしたひをはやす小鞆  
をのかとち寄あふ中の若狸  
おもひくゝに好む料理や  
湯の山の病人は皆験をえて  
箱根をあゆむ道の達者さ  
逸物の馬こそことに秘蔵なれ  
牛はあれともやせてせんなし

長興  
立圃  
興章  
元清  
興時  
重都  
巡也  
長興  
立圃  
興章  
元清  
興時

百性はあまり年貢をなしかねて  
思ひのたねか作る粟ひえ  
月にちよとよしなき人を見参らせ  
身にしむ琵琶の手つき顔つき  
竹生島へまうつる袖は昔にて  
うらやましさやおかむお宝  
若水の継目の朱印いかはかり  
人の出いりおほき門外  
時代までゑえう栄花の花の宿  
永き日めもするねふれる袖  
よむ歌の心長閑に思案して  
声尋常に聞ゆうくひす  
くる春は京もいなかもおなし事  
志賀からさきに行は道つれ  
遊山するふねを数く押ならへ  
いとみあいつゝ鵜縄をそ引  
山の端は月出さうな気色にて  
うすらき申稻妻の影  
幾秋かふるきあはせのさやの紋  
家につたふる太刀のこしらへ  
いかばかり地走におもふ響ならん  
あちらこちらへめくるかわらけ  
谷風は又ふきあくる高尾山  
みねくゝにひらくちれる紅葉  
ッ  
梢にやあつまる猿の数多み

重都  
巡也  
長興  
立圃  
興章  
元清  
興時  
重都  
興章  
元清  
長興  
立圃  
興章  
元清  
興時

人のめにさへ犬はおそろし  
 おさあいのひたいはすみによこればて  
 作りそこなふまゆは何そも  
 かいこをやし心にかけす銅置て  
 他国のものもすめる越前  
 うり物はおほきつるかの市の棚  
 弓張月のめすやみのかさ  
 もりにける小田のかゞしはころひ果  
 こゝもかしこも玉こかす露  
 鉄炮を打そこないし狩の場  
 さそな天氣のおしきすへらき  
 風にちる花に酒宴もそゝろにて  
 あつまの春をおもふ清水  
 順札のまだ行ききや雲霞  
 それかとうとふうたはきこゆる  
 見めよきも打ましりつゝ田を植て  
 誰になひくそこのおなこ竹  
 よはい人は垣の内へとにけかくれ  
 狂言は唯おかしかね引  
 心にやかけし近江の海の底  
 何としてか□鮪をとるへき  
 とひまはるみさこは未ちいさくて  
 あた矢をはなつ弓せせんなき  
 わつらいは次第〜におもくなり  
 つほねをあくる更衣あはれさ

元 清  
 巡 也  
 立 圃  
 長 章  
 興 章  
 重 都  
 立 圃  
 長 章  
 興 時  
 興 時  
 立 圃  
 長 章  
 重 都  
 立 圃  
 元 清  
 興 章  
 立 圃  
 長 章  
 興 時  
 興 時  
 立 圃  
 長 章

たく香の煙にくもる空の月  
 かのおもかけは露ときえ〜  
 ♪おもひねの夢ふとさます秋の風  
 ひるねして  
 漢をいつる舟の帆のかけ  
 海賊やふかく人めをつゝむらん  
 世のみたれこそ難義千万  
 やかましくわかれの時分鳥鳴て  
 旅人したふやとのけいせい  
 ことつくるふみなさけを書くとき  
 あいのつかひは大事なるもの  
 もらはんも世に珍敷花の枝  
 せいこそいたせ花の茶の会  
 一門の寄合ときはのとかにて  
 銭あきないにとくやとるらん  
 はくちには月見る事も忘れ  
 初雁よりも「」の汁  
 長夜ふかす小さしきのうち  
 名 露は袖に昔〜の物かたり  
 ひたゝれをきておはすおほちこ  
 「」うそさひし  
 しヒヒヒヒヒヒヒヒのむらの池ヒヒヒヒヒヒヒヒのあたりは  
 とひくる驚もたゝひとつかひ  
 すなほなるときは延喜のまつりこと  
 富貴しにける民の家〜

巡 也  
 立 圃  
 長 章  
 重 都  
 立 圃  
 興 時  
 興 時  
 立 圃  
 長 章  
 興 時  
 興 時  
 立 圃  
 長 章  
 興 時  
 興 時  
 立 圃  
 長 章  
 興 時  
 興 時  
 立 圃  
 長 章

雨乞のその利生こそありぬらめ  
をとり催す氏神のまへ

はつくと羽音冷し宮すゝめ  
わたりはしめの小鷹いかほと

月の歌を書ぬる紙は引あはせ  
いろくなりし屏風見事さ

はれかまし客にしらすな勝手口  
火もとを申つくる十柱香

こよひしも吹ぬる風はさうくし  
打まはりたるひやうし木の音

のりごはに巻たる絹を巻かへし  
張ぬる墨のなかれもきよき掛物

いにしへの双紙をひらきろんすらん  
いたつらにすむ児はいくたり

花よりもうつくしかりし柳かみ  
幾春かけてむすぶ縁刃

長興 十八

立園 二十

興章 十四

元清 十四

興時 十二

重都 十三

巡也 九

〈資料四〉

口きりの茶の湯をしるやつほの内

興章

元清

長時

元清

巡也

立園

重都

興時

長興

元清

冬はきとくにひらく梅か枝  
鶯の雪打はらひとんて来て

長閑に楽の音を聞ゆる  
公達は船をかすみに乗うかへ

島に洲崎におほき供入  
たつ波に月の釣針論しあひ

草の花をしぬふきぬの糸  
忍ひ妻きてこそかよへ紅葉笠

しなをあらせておとる腰もと  
のるからに見事さうなる馬のふり

いまた敵にはあはぬ若武者  
あけつゝもこはくおほゆるやり戸にて

なれさる部屋に夜はいする比  
女房はいか程船をこのむらん

それ見給へや彼つはりやみ  
冷しきりんき心の文のうち

後のあしたの月もいやく  
秋迄も鶴つかふ事をわさにして

くるしきはさそひえの煩ひ  
耳にきくうき世の花の真盛

調子はいかに春風のをと  
二草かりの笛は霞のうち候よ

須磨のうへ野に住し幽霊  
ほろくとふる村雨はなみたにて

かたみのきぬをうつしころこ

立園

歩月

政家

興時

又可

立園

歩月

興時

又可

立園

興時

又可

立園

歩月

又可

立園

政家

さよふけて月こそひよつと出にけれ  
 あたゝめ酒をのみやるさかつき  
 はかりことめくらす鬼のおそろしさ  
 いかて車にをもちつみ科  
 なからへし命はつらきわたりもの  
 いたいけしたるへかのかはゆさ  
 おさあいの心はとれもすなほにて  
 いさめ申せよ賢より賢に  
 めしたりししゆすのはかまは似合すや  
 衣紋つくろひ見るひんかゝみ  
 二ヶ傾城はゆきゝの人も恥やらて  
 めめりた歌をうたふ門たち  
 夕暮は常にもかもな恋心  
 誰かあいつの鐘を待らん  
 □山や「」たる度ゝに  
 〓資料 五〓  
 〓春立と世に鶯や触使  
 在々所々も梅にほふ宿<sup>32</sup>  
 〓植置る藪のあちより東風吹て  
 一かた見事いり方の月  
 虫の音もいとしんゝと聞え候  
 〓色つく野辺も近き小座敷  
 住居越し町屋を離仕り  
 〓焼毛を唯おそれぬる人

興時	歩月	又可	立圃	政家	興時	興章	又可	立圃	興章	興時	政家	又可	立圃	興章	興時	長興	元清	同	同	清	同	同	興	〓以下略〓
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	---	---	---	---	---	-------

## 翻印 「みやこいり」

南里 みち子

初めに全十冊の内「みやこいり」を含む一冊についての簡単な書誌を記す

横本写本一冊、縦16・5cm×横23・2cm。表紙、紺色雷文つなぎ花模様型押し。題簽、鳥の子、朱色地に金銀泥の草花模様入り短冊簽、縦10・2cm×横3・0cm。「はまいて 日ほんき／むまそろへみやこいり／いるか ようちそか」と墨書。本文字高、12・7cm。各半丁十二行詰め、一行十三字〜十八字。全百丁。内「みやこいり」十七丁。

### みやこいり

さるあいたかまくら殿くはんたうのために上らくあるけんきうくはんねん三月三日にきやうちやくあるへしとておなしき二月八日にくはんとうを御たちましゝていそかせ給ひけるほとにあふみのくにゑち川へほとなくつかせ給ふみちすからのけたてほこりかゝりあからさまなるきやう入のあるへしともおほへすとて御きやうすいをめされひきつくろいてみやこ入あるへき也との御ちやう也さるあいた

みやこにはこしら川のほううくきやう大しんをめされひやうへの  
すけか此た」ひしやうらくときこえしはいつの日のなんととき三月  
三日とそうし申それふしはゑひす心にて二日のよひにやのほるらん  
よのうちにてとき三ときまたんはなにかはくるしかるへきとて二日  
のよひよりほううは三てうこうちへみゆきなるとそきこへけるさ  
てもきしきは申はかりもなかりけり三けてんしやう人のこきすくる  
まをとはせらるそもく三けと申はこのゑなんはうたかつかさその  
ほかつちみかとの中しやう殿八てう殿九てう殿うくはんむくはんの  
人々さてみな御ともときこえけりみやこあ」たりのさとくへにふし  
みふかくさとはやはたよともあらいたけたのさとまつに花あるふ  
ちのもりいなりにまくまの六はらやさかちやうらくしきほん中山き  
たしら川かものりうけうんりんしさてふなをか山やれんたいのをは  
らしつはらくらま山きたのやひらのときはのさとさかほうりんしう  
つまさとうし四つかかつらのさとこか山さきやたからてらそのよの  
うちにきやう入するめんくのともしひたいまつはみやこのうちに  
くまもなしあはたくちより三てうまてはすきまなふ」こそ見えにけ  
れ物によくくたたふはよしのたつたのはなもみちのいろめきあへ  
ることく也さるあいたよりともよりちふのやとへ御つかいたつめ  
つらしからぬ事なれとも此たひのしやうらくはことにゆしきはれ  
なればひきつくるいてきやう入あるへき也との御ちやう也しけた  
うけたまはりかしこまつては候へともみちのあひたのせんちんをは  
つかまつり候ぬみやこ入のせんちんをはちよのかたへおふせつけら  
れ候へと御返事を申さて心のうちにおもはれるは此たひきみのじ  
やうらくはくはんどの」いはひの御ため也かくてちたいのきあしか  
りなんとせんしらいてうへまいり申されけるはみやこ入のせんちん

をちたい申事へつのしさいにて候はずわれらかせんそのならひには  
まんときよりもいせんにみやこ入をつかまつらす候せんちんつかま  
つれとの御いならはおほそれなからきみのきやう入をとりのごくま  
て御のへ候へしけたかきやう入をさるのごくにつかまつり候へし  
それよりもいせんにとうごくせいを御とをし候へと申あけられけれ  
はらいてうきこしめしその」きならばとうごくせひをとすへしと  
わたのこた郎をまぢかくめしての御ちやうにはみやこ入のさきうち  
をいそかるへしとおふせければわた此よしをうけ給はりやかてりや  
うちやうつかまつり五百よきをあいくしてあはたくちをうちすきて  
はや三てうにそつきにけるさてほうわうの御せんのみやうしなのり  
のといやうにはくないのはうくはんたちはなきんとときこそきこ  
えけれ大しんくきやうてんしやう人よしもりを御らんしてあつはれ  
ちふはよきおとこゆしきふしの」こつからやとこゑくへにほめ  
られたりきんときは御らんしてたいまとをすゆみとりなのつてと  
をせとありしかはわた此よしをうけたまはりゆみとりなをしきた  
いし大をんあけてそなのりけるそもくこれはくはんむてんわうに  
十四たいのこうるんさかみのくにのちう人わたの小太郎よしもりと  
しつもつて三十六となりのりもあへすたつなうちこみさくめかいてそ  
とをしけるそのつきにけよきむしや干きはかりにてさくめかいてち  
かついたりきんとき此」よし御らんしてなのつてとをせとありしか  
はこれはみうらの一もんにへいろくひやうへよしむらとなりのりあへ  
すとをしけりそのつきを見てあればあふみにさくききやうたいみの  
くくにときとを山おはりにほんふかいとうみかにはきらといじや  
うてうしなのくくにほうんのもちつきすは殿はらむらかみたかな  
し井のうへかいは一てういたかきしもつけのくにはなすしほの

やしとさたけの人々下つふさのくに、は」ちを山うつのみやさかみのくにはといおかさきさてもふところしまのころとるはなかりけり十二万きのおふせいかうちつゝいたるありさまはおひたしとも中へに申はかりはなかりけりさてもほうわうよりのせんしにはせんちむ申しけたゝはなにとておそくとをすそあつまのふしのれいきしかまつそのゝちにせんちんとをすふしきさよいそひてせんちんとをすへしとかさねてちよくしたちければたゝいまと」こそ申ければかやうに申されければとも大またらのむかはきをあら川の御しよにとりわすれむかはきに事をかいたるはいかゝせんとの御ちやうなりほんたの二郎うけ給りさん候一とせにしきとたいちのときあふしうのじう人おくりの四郎かゑさせたるかはの候かおもしろきほしかいてめつらしきかはにて候へはこれをめされ候へとてむかはきにこそたゝせけりしけたゝの御ちやうにはほうわうの御くるまはゆんてかめてか見て」まいれおくすみいそきみてまいりめてにて候と申しけたゝきこしめしこゝろへたりとの給ひてすてにいたち給ひけり御しよたいりりによほうたちこもりひみすやことなきあへしの下ちよにいたるまでせんちん申しけたゝはなにとておそくとをすらん日ほん一はんのいやうのものときいてあるかいやうなるしやうそくかあらためてきんすらん心つくしととりへにしかたゝをせしとまぢられしを」物によくへたとふれはそよやすすみよしのねさしそめたるふたはのまつのちよをふるへきそのすへをおもひやりたるふせい也又こゝにけよきむしや干きはかりにてさゝめかいてちかついたりきんとき此よし御らんしてこゝいまとをすゆみとりなのつてとをせとありしかはこれはむさしのじう人よこ山となつてとをるそのつきをみてあれはしんのとうたんのとうひらやまたういのまたた

う」むこ山たうこたまたうせいいたう七たうの人へはいきみにいさんてとをせともちゝふはいまた見えきりけりふしきにおほしめすところこゝにちやくしの六郎花まちかぬる山のはにかすみこめたる三日月のほのへといつることくにてしつゝとうつてちかついたりしけやすのそのひのしやうそくは花やかにこそみえにければたにはあきののこかいてついたりたるかたひらをみなしるおつてひつちかへせいかう」の大きくちわききはせめてひつこうていろへすりのひたゝれをかみ六寸むにきなしはんとうさひのゑほしをつゝひきにおらせまゆ七ふんにためつけかせのにはひのゑほしかけこおとかにひつゝめなつつけのかはのむかはきわききはせめしろかねとうのこしの物よこめのあふきとりそへてまへはむにそさゝれける二しやく七すん候しこかねつくりの御はかせあしをなかにむすんでさけ十三」さいたるたかうすへうをはつたかにとつてつけ三人はりしめのせきつるかけさせまん中みきりよこたへむまにおいてはしらつきけあけ三さいになりけるかおかみはよせてたくはかりをきたるくらこそちんじやうなれそうはきんふくりん中はしるふくりんなんりやうをきにかへしたけにとらをははせつみにつんたるあつふさのせんこかゝやくやうなるをしはうちなかにさらり」とかけいつもくつのはんみふとうしてひつてとちかねまつしろなるにすたれもんのたつなをつほにきつと入させ御むまきうとてひつたつるひきよせゆらりとうちのつてゆんでへ九つめてへ七つのたつなひきよくをつくしつゝさゝめかいてとをしける五十きのせいにはちしろのひたゝれきせゆんでのわきをそとをされけるさて又五十きにははなたいろの」ひたゝれきせめてのわきをそとをされけるひたゝれをこちんにうつつはものに一やうにきせつれ七百よきいさみにいさんてとをさされ

たりかのしげやすと申はにつほん一はんのひなんにてましませはくものうへまでかくれなし御しよたいりの人へ上下はんみむをしなへてあらいつくしのわかおとこやけさよりとをりし大せいに心をとむる事もなしたゝいまとをすわかふしのおもしろさよと」さゝめかいて六郎しげやすに心うかれけるあいたしげやすのやすのしをかいてまほりにかけにけりそれよりしてきやう中にうつり心のある人をやすまよいと申也さるあひたしけたゝのさきうちをばさつしきたうかうつはうとて此たひのさきうちをさつしきたうにうたせらるをとなさつしき三百人にかちのひたゝれにくろいとこのよろい一しやうそくをせさせ一やうにこそとをされけれそのほかのむまともにて「かうしくりけきはらけさひ月け大くろこくろなみのこたつてくりけつるふちかのこひはらけむまそろへて三百ひきにしろかねをのへつけこかねをもつてひるまきしたるさほを一やうにさらせけるむま一ひきに八人つゝとねりをそへてとをされたりつきにいぬをとをされたりくろいぬそろへて六十ひきとらけそろへて六十ひきとら毛のいぬのとねりにはまきのひたゝれにしらみかきにみかいたるかねのてはうを」こしにさしあかかねの大すゝをみつゝつけてとをされたりくろいぬのとねりにはかちのひたゝれにこかねをもつてのへつけたるきんのはうをこしにさししろかねの大すゝをみつゝつけてとをされたりさつしきともからうせきかみちのあいたのめさましかいさみにいさんたいぬともをみちなかへひきいたしくひあはせてはさつとはのけくいあはせはひきのけいさみにいさんてとをされたりきやうわらんべかこれをみて「やおそろしやあれをみよあのいぬともにくはれてとうこくふしのおこなけなきにわらはれんもさすかなりこなたへのけやもつともとてかはらおもてへさつとといて

ちゝふはいかにおそひそといまやゝとまちたりけりさるあいたしけたゝのその日のしやうそくは花やかにこそ見えにければたにはあきののにしらきくついたるかたひらをみなしるおつてひつちかへせいかうの大くちわきゝはせめをけかはとうのはらまき」くさすりなかにさつくととき大ひきりやうをうこんとかきとひはいろ三いろにそめたるひたゝれをかみ六すんにきはんとささひのゑほしをつゝたかにおらせまゆ八ふんにためつけかせのにほひのゑほしかけおとかにいひつしめなつけのかはのむかはきわきゝはせめしろかねとうのこしの物よこめあふきとりそへてまへはんこそさゝれけれ四しやく二すんのかうひうのたちあしをなかにむすんでさけ二十四さいたる」きりふのやはつたかにとつてつけゆみはほそかね六人はりしめめせきつるかけさせまん中みきりよこたへむまはちゝふの大くろとてなにしあふたるめいば也をかみあくまであつうしておつさまむかふよこはたはりをくちそうたふつまねのくさりしくあいほねなみよめのふしはつくりつけたることく也をいたるくらこそおもしろけれかしのまかりのしらはねにきんふくりんをふかゝとおもふさまにかけさせと」らのかはのきつつけにしきかはのうはしきこもんふたへちからかはむさしあふみのつほふかなるにへうのかはのおをりをさゝせあつふさかけてそめされけるかしははらかせんちんにて百きのせいをたまはりさかおもたかのよろいのみのとときとかゝやいてかな物きひしくうつたるを百りやうそろへ一やうに一しやうそくをせさせめてのわきをそとをされけるゆんておはあねさきか百きのせいをたまはつてうのはなをとしのよろいの」みのときとかゝやくをかな物きひしくうつたるを百りやうそろへ一やうに一しやうそくをせさせゆんてのわきをそとをされけるはんしやうそくのつはものと

もましろのたかをすへつれ百八十き一やうにはゝめきたつてそとをしける御むまそへにはたれへそかた田のくまわうふくたのまんさいほうらいとみてわうまるこのものともをさきとして八人のわらはにあかちのしきのひたゝれにもよきにほひのほら「まきを一やうにきこめさせ御むまのせんこにたて給ふさつしきともかその中にきんじだんじせと風はや風こへいちなんとをさきとして八十よ人のさつしきともかなかたなのさやをはつしさをしつかにはらつてとをるほんたはんさはふきやうにて一ちやうにみところのさんしんをおらせつゝしきをさためうちとをすみうちとさまの人々につききうめんへゝのいてたつやうこそおもしろけれ」ひおとしもよきこさくらはせのにはひあらいかはくろかをはとすちおとしそのいろへにて月けあしけのほかそなきいづれもやさしきいてたちにて色めきわたつたありさまはあをほましりのをそさくらこれにはいかてまさるへきこちんにつゝくはたれへそしやていになかのいけかみの五郎七百よきのせいにてしこりこつてとをされたりいさみにいさんたい「ぬともを三十六ひきそろへてきつなをきつてはなしつゝさゝめかいてそとをされける七千よきの大せいかうちつゝいたるありさまはおひたゝしとも中へ申はかりもなかりけりきんととき此よし御らんして心をつくしてまちかくるしけたゝこそとをせとこしちへうちいて給ひたゝいまとをすゆみとりなのつてとをれとありしかはさらぬていでうちとをす二てうの大なこん此よしを御らんしてそれんきのみかと」の御ときはそらをとふてうるいちはをはしるけた物あをほのふえをふいたりししゆしやくるんのおにたにもちよくをそむかぬならいなるにましてや申さん人けんにてわうどにすむ

ゆみとりかいかてせんしをそむくへきかたしけなくもせんしの御つかいはさかのうゑのきんとき也はやくなのれとありしかはしけたゝうけ給りかたしけなくも一てんのきみのせんしをかうむるこそちゝふかいゑのめんほくなれとこまうつすへ「ゆみとりなをしきたいし大おんあけてなのるこゑそもへかまぐらのひやうへのすけよりもこの此たひのせんちんをいかなるものとおほしめすせいわてんわうにたい五のわうしちんじゆふのしやうくんまさもちそのちやくなんにきりはら大ふそのちやくなんによしみのまさすみそのちやくなんにさうまのまさかとそのちやくなんにさうまのや二郎そのちやくなんにしたのこ太郎そのちやくなむにちゝふのしやうしそのこちゝふの二郎しけたゝとしつ」もつて二十八とたかへとなのられけりほうわうをはしめたてまつり上下のなんによ一とうにおもしろののりやうやこゝにてむまをとめよかしこにてたつなをひかへよかしいま一とあひみんとぞみあかりたちあかりみれともへあらはこそしたひへにとをくなる物によくへたとふれはくらまの山のほとゝきすうつき一日のあけほのにすこへ一こゑをとつて山ふかくゆくかこく也さるあいたほうわうはあかすおほしめ」さるれはいま一とあひみんとのせんしにて五てうたかくらへ御くるまをとはせらるその御まゑにてしけたゝはさきのことくなのりつゝさゝめかいてそとをしける日もくれてよに入はほうわうもくはんきよなり御とものくるまもみな御しよさまへ御かへりあるそのほか上下のけんししゆもしたくへにかへりけるとりいぬのときかまぐら殿御心しつかにしきもくたゝしきみやこ入はけにめてたふこそきこへけれあけの日にもなりければやかてさんたい申」さるゝわたちゝふをさきとして大みやういじやう三十六人御ともとこそきこへけれその



中にちゝぶはししてんのかくのまへめしいたされ候てみてもあか  
 さるしけたゝをゑつにうつしておかんとてししてんのかくのまに  
 ひかしむきにかゝせられ見たくおほしめすときはかのししてんのか  
 かくのまへみゆきならせ給ひてゑいらんあるとそきこへけるさて  
 くそのうちにかまから殿う大しやうのこりやうにくはんとならせ  
 たまひてくにくの大一みやうせうみやうにをのくはんとをく  
 たされけりよりの御ゑいくは申はかりもなかりけり

受贈雜誌 (昭和五十年十一月〜五十一年六月) ②

国文学研究ノート (神戸大同会) 56 / 国文学言語と文芸 80 / 国文学  
 放 69 / 国文学論叢 (龍谷大) 2021 / 国文白百合 7 / 国文目白 15 /  
 国立国語研究所年報 26 / 古典と民俗 (関西学院大本位田研) 2 / 語  
 文研究 41 / 駒沢国文 13 / 佐賀大國文 3 / 札幌大学教養部・女子短大  
 部紀要 8 / 薩摩路 20 / 滋賀大國文 13 / 静岡女子大学国文研究 9 / 実  
 践国文学 89 / 島大國文 45 / 淑徳国文 17 / 上智大学国文学論集 9  
 / 女子大國文 (京都女子大) 78 / 女子大文学 (大阪女子大) 27 / 人  
 文研究 (神奈川大) 63 / 人文研究 (大阪市立大) 27 卷 9 / 人文論究  
 (関西学院大) 25 卷 2 3 4 / 人文論集 (静岡大) 26 / 親和国文 10 /  
 成蹊大学文学部紀要 11 / 成城国文学論集 8 / 清泉女子大学紀要 23 /  
 西南文学 3 / 専修国文 1819 / 高崎経済大学論集 18 卷 2 3 (合) 4 /  
 樽 (樽の会) 2 / 地域文化研究 (甲南大同会) 1 / 中世文芸論稿 (龍  
 谷大説話会) 1 / 潮音 62 卷 1 / 肇国 381 382 385 386 387 388 / 鶴見大紀要  
 13 の 1 / 帝塚山学院大学日本文学研究 7 / 同志社国文学 11 / 藤女子  
 大学国文学雑誌 18 / 東北大学文学部研究年報 25 / 同朋国文 89 / 東

横国文学 8 / 徳島大学芸紀要 25 / 都大論究 12 / 富山大学文学部  
 文学科紀要 3 / 都立大学方言学会会報 66 / 名古屋大学国語国文学 37  
 / 名古屋大学文学部研究論集 23 / 並木の里 11 / 日本学術会議月報 16  
 卷 11・17 卷 1 3 / 日本女子大学紀要 24 / 日本文学研究 (大東文化大  
 ) 9 10 11 特 15 / 日本文学研究 (梅光女学院大) 11 / 日本文学研究 (高  
 知大同会) 13 / 日本文学研究 (同会) 3 / 日本文学ノート (宮城  
 学院女子大) 33 / 能楽研究 2 / 梅花女子大学文学部紀要 12 / 白路 30  
 卷 12・31 卷 1 2 3 4 5 6 / 殖生野国文 6 / 比較文学年誌 12 / 一橋論  
 叢 74 卷 5 6・75 卷 1 2 3 / ヒブリア 62 / 広島女学院大学国語国文学  
 会誌 5 / 広島女子大学文学部紀要 11 / 文化 (東北大) 39 卷 3 4 (合  
 ) / 文学研究 (九大) 73 / 文学史研究 (阪市大) 16 / 文学年誌 (文  
 学批評の会) 1 / 文学論稿 (九大教養) 23 / 文学論藻 (東洋大) 50  
 / 文化と言語 (札幌大外語) 9 卷 1 2 / 文教国文学 4 / 文経論叢 (弘  
 前大) 11 卷 3 / 文芸研究 (東北大) 80 81 / 文芸研究 (明治大) 34  
 35 / 文芸と思想 40 / 文芸と批評 4 卷 4 5 / 文芸論叢 (大谷大) 6 /  
 文献ジャーナル 14 卷 9 11 12・15 卷 1 2 3 4 5 / 平安朝文学研究 3 卷  
 2 7 / 別府大学国語国文学 17 / 待兼山論叢 9 / 万葉 90 91 / 宮城教育  
 大学国語国文 7 / 武庫川国文 8 9 / 明治大学人文科学研究年報 16  
 / 野州国文学 16 / 山口大学文学会誌 26 / 立命館文学 358 359 (合) 360 361  
 (合) 362 363 (合) 364 366 (合) 367 368 (合) / 論究日本文学 39 / 和洋  
 国文研究 11

受贈抜刷

球磨・人吉弁小考 一助詞・二助動詞

東 秀吉